

English Garden 第88話

"The war was carrying the study of Japanese to undreamed-of new heights."

Edwin O. Reischauer

「戦争によって日本語は思いもよらぬほどの人気科目になってきた」 ライシャワー

元駐日アメリカ大使エドウィン・O・ライシャワーの3回目です。表題の言葉は、日米戦争の開戦によってどの大学でも日本語がたちまち人気科目になったことを言っています。

1938年秋、ライシャワー夫妻は中国での勉強を終えてアメリカへ帰りました。エドウィンはハーバード大学に戻って中国語を教えながら博士論文の執筆を続け、円仁の「入唐求法巡礼行記」の第一巻の翻訳を完成して、翌年博士号を受けました。またエリセーエフと共同で日本語の教材の改善に取り組み、1940年に「大学生のための日本語入門」上下2巻を完成しました。これは増補改訂を続けながら、20年間使われました。

1941年夏、日米間の緊張が高まってくると、国務省から夏のあいだ極東課で働くようにとの依頼があり、戦争を回避するための外交に参加できるならと、進んでワシントンに向かいました。そこでは戦争を避けるためのいろいろな提案もしていますが、上層部まで届かなかったようです。提案の中には、日本が開戦を決意するきっかけとなった「対日石油禁輸」に反対する意見も含まれています。

父のオーガストは日本での伝道が行き詰まったためか胃潰瘍が悪化し、手術のため母と妹を伴って帰国し、ロサンゼルス付近に住んでいました。

12月、ついに太平洋戦争が勃発すると、日本研究家は一躍脚光を浴び、講演の依頼も多くなりました。

エドウィンは陸軍からの要請で科学用語の和英辞書を一週間でまとめ、さらに和英辞書の「海賊版」を作りました。これは数冊の日本の辞書の写真版を作って「アメリカ版」としたのですが、ハーバードから発行されると飛ぶように売れたそうです。

1942年早々、戦争による変化が現れました。新学期を待たずに初歩日本語コースを始めることになったのです。しかも、それまでの受講者は10人足らずだったのに、100人ももの志望者が押しかけました。これはどの大学でも同じで、講座を新設した大学もありました。

夏には陸軍通信隊の依頼で、翻訳者と日本軍の暗号の解読者を養成する新しい学校に協力するため、ワシントンに行きました。日本の外交電報や日本海軍の暗号、日本陸軍の輸送暗号などかなりの解読に成功し、ミッドウエー海戦の勝利や日本軍の輸送路の破壊などにつながりました。

また、エドウィンは日本軍向けの降伏勧告ピラも作りました。玉砕を目前にした日本軍の指揮官に「無闇に命を捨てることなく、部下を生きかして戦後日本の復興に尽くすように」と訴えたのです。翌年には陸軍参謀情報部からの要請で、少佐の身分を与えられて、傍受電報の情報を分析するさらに極秘のセクションで働きました。

1944年1月、ニューギニアの米軍の手によって日本軍の暗号簿がそっくり手に入ったため、暗号は解読機械によって一挙に解読されるようになりました。

戦争末期、このようにエドウィンは日本陸軍の配置に関する情報や外交電報をほとんど読んで、鳥瞰図を見るように戦争全体を眺めることができたと言います。

その当時を回顧してエドウィンは、「自分は生まれ育った日本の国や文化を敬愛していたが、100パーセントアメリカ人としての自覚を持って行動していた」と語っています。そして、「民主主義の芽を摘み、海外への拡張を図った日本の軍部」を、日本人のために憎むべきだと思ったそうです。実際に、暗号の解読に携わった仲間や部下の中には、日本に対する憎しみなどは存在しなかったということです。

戦争を体験された方々は、当時日本では敵性語として学校での英語の授業が禁止されたり、日用語だった英語が滑稽な日本語に置き換えられたりしたこと（例えば「マッチ」が「火つけ木」）や、「鬼畜米英」と憎しみをあおられたことを記憶しておられると思います。国際的な視野を持つとはどういうことが、つくづく考えさせられます。

(次回に続く)

参考文献:

"My Life Between Japan and America" Edwin O. Reischauer, Harper & Row, Publishers, New York, 1986

「ライシャワー自伝」エドウィン・O・ライシャワー著、徳岡孝夫訳、文芸春秋、1987年

